

社会・経済システム学会 第39回大会 大会テーマ: 主体を含む人工物としての社会・経済システム

開催日:2020年10月31日(土)・11月1日(日) 場所:東京工業大学大岡山キャンパス

社会・経済システムは、その構成要素として主体・組織・制度のみならず、機械装置から情報ネットワークまで様々な技術的産物も含むシステムである。それゆえ社会・経済システムは人が意図して或いは意図せざる形も含め構築した技術社会複合体としての人工物である。主体を含む人工物としての社会・経済システムに対して妥当な知のありようを構築することは、積年のシステム科学の課題でもある。

システムという概念は、我々が世界を認識し理解し働きかけるための枠組みである。そこでは、何らかの言語により対象を認識し理解するためのモデルを構築するシステムモデリングと、得られた知識をもとに何らかの意図に応じて社会へと介入するシステム実践の両者が課題となる。前者はモデル真偽について真偽のコードでの評価とコミュニケーションがなされ、後者では、対象の理解や解釈は妥当であるか、対象に対する意図と介入の目的は妥当であるか、目的を実現するための代替案（政策シナリオ）は妥当であるか、代替案選択のための合意形成は妥当であるか、代替案の実行は妥当であるか、目的に対して得られた結果が妥当であるなど妥当性のコードでの重層的な評価とコミュニケーションがなされる。

ここでは、対象に対する認識や解釈に基づき、何らかの意図に基づき達成すべき目的を創出し、目的を実現するための代替案を提起し、代替案の選択に関する合意を形成し、代替案に基づき介入を実行し、介入の結果として対象の変化を把握・評価すると同時に、そのようにして書き換えられた新しい現実に対する新たな認識や解釈を構築するという循環的なプロセスが問題となる。この循環的なプロセスとしてのシステムモデリングとシステム実践に対する適切な知の運用とは何か問われねばならない。対象となる古い現実への介入の結果は目的に即して評価されるだけではない。産業革命やインターネット革命がそうであったように、大規模な社会の改変において、我々の社会の現実そのものが技術のみならず組織や社会のあり方を含めて変容し、その変化が新たな認識や解釈と意図を生み出すという循環プロセスが生じている。この循環プロセスでは、真偽のコードによる評価とコミュニケーションとは異なる、プロセスの様々な側面で妥当性のコードに関する評価とコミュニケーションが求められる。

インターネット革命の後に出現したグローバルな社会・経済システムでは、その基盤となる産業やエネルギーなどのハード技術、情報ネットワークやAIをはじめとする様々なソフト技術のみならず、その上での人々の働き方や働く場所、消費や生産・販売の組織とそのマネジメントのありよう、ビジネスモデル、社会制度、様々な社会的な機能と構造とそれらに関する膨大なデジタルデータが、累積的にしかも急速に書き換えら蓄積されている。人々の社会に対する理解や解釈そのものも大きく変容しており、その背後にある解釈の構築を媒介するシンボリックな相互作用の構造もまた大きく変化している。この変化は人間にとって決して望ましい方向に向いているわけではない。変化の道筋を人間の生きる地平として望ましい方向へと向けるためには、そのプロセスの手綱を握るための理論と方法と実践が真摯に求められる。

本大会では、社会・経済システムを理解し説明する知だけでなく、あり得る現実をデザインし、今ある現実へ介入し、変化をもたらす道筋を実践し、その道筋を管理するシステム知の総体について、さまざまな視点からのアプローチが求められる。主体を含む人工物としての社会・経済システムに対して、多様な観点からの方法論的・理論的・実践的な研究発表と盛んな議論が行われることを期待する。

大会実行委員長:出口弘